

## 2. 新聞記事の紹介

「いなみ野ため池ミュージアム」について報道された新聞記事を要約  
(これ以外にも各イベントについての記事は多数)

- 2002.01.07.(神戸新聞)
  - ・総合学習で水や環境問題について学んでいる平岡東小学校の児童が、喜瀬川で学習のまとめとして清掃作業を行った。児童は「思ったよりゴミが多い」「誰が捨てたのか」「もう川を汚してほしくない」などと話した。
- 2002.08.02.(神戸新聞)
  - ・稲美町の子供らが、ため池 40 ヶ所の自然状況や水質などをチェックし「通信簿」を作成する現地調査に取り組んだ。小学生は「ゴミが多くて驚いた」、「代表的な池の水質や水辺の状況を詳しく調べたい」と興味を深めた。
- 2002.08.24.(神戸新聞)
  - ・東播磨地域には多くのため池が集中。県は地域全体を「いなみ野ため池ミュージアム」とし、優れた景観や豊かな自然環境に親しむ空間として位置づけている。
- 2002.09.21.(神戸新聞)
  - ・東播磨臨海広域行政協議会主催「まちづくりフォーラム」のパネルディスカッションで「ため池」をテーマに広域行政のあり方を提案。
- 2003.01.10.(神戸新聞・「発言」欄)
  - ・今では悪臭を放つため池を県や市と連携しながら、憩いの水辺空間に変身させたい。「地域全体が博物館」というエコミュージアムの精神に沿って、ため池を通して地域の活性化を目指したい。
- 2003.06.29.(産経新聞)
  - ・県と 3 市 2 町は今年 2 月、ため池を中心に、この地域全体を「屋根のない博物館」としてとらえる「いなみ野ため池ミュージアム」の基本計画案をまとめた。
- 2003.08.12.(神戸新聞・「記者手帳」欄)
  - ・ミュージアム事業は、ため池を整備し、景観をつくりかえる試みではない。池管理の担い手を育て、住民がため池に集える設備やイベントを生みだそうとする地道な取り組みの連続だ。
- 2003.10.23.(神戸新聞・「水は語る」欄)
  - ・昨年、3 市 2 町に及ぶ約 600 ヶ所のため池に注目し「いなみ野ため池ミュージアム創設プロジェクト」が始動した。一言でいえば、池そのものを、水辺の博物館にしようというまちづくり運動だ。
- 2003.11.15.(神戸新聞)
  - ・世界舞台「水を守ろう」。タイの首都バンコクで開幕する「第 6 回世界閉鎖性海域環境保全会議」に明石西高校の 2 名が出席する。席上、「ため池ミュージアム」活動に参加して得た結果について研究発表する。
- 2003.12.07.(読売新聞、朝日新聞、神戸新聞)
  - ・「いなみ野パールプロジェクト」始動
- 2003.12.26.(神戸新聞)
  - ・フィリピン「ムスリム・ミンダナオ自治政府」の幹部が、住民がまちづくりに参加するプロジェクト「いなみ野ため池ミュージアム」の手法を学ぶため、東播磨県民局で研修を受けた。
- 2004.02.12.(神戸新聞)
  - ・峠池でクリーンキャンペーンが行われました。参加した中学生は、「峠池に近づくのは初めて。池というより湿地みたい。土手の隅にゴミが多いのに驚いた」と話す。
- 2004.02.23.(神戸新聞)
  - ・身近な水へ思いー寺田池の堤防改修に地元住民が提言

- 2004.03.12.(神戸新聞)
  - ・「ため池協議会」の関係者ら約 200 人が参加し、5 月にも協議会同士の交流を図るため、「ため池協議会連絡会」を設立することを決定。
- 2005.03.19.(神戸新聞)
  - ・ため池を世界遺産に一県立農業高校が取り組んでいる「いなみ野ため池群、世界遺産化計画」が県教委“グリーンスクール”に選定された。
- 2005.11.24.(神戸新聞)
  - ・全国の農業高校生が研究成果や技能を競う「第 56 回日本学校農業クラブ全国大会」の意見発表会でこのほど、県立農業高校生物工学科 3 年、増田理央さんがため池の環境保全をテーマにした発表で最高賞の文部科学大臣賞に輝いた。
- 2005.08.28.(産経新聞)
  - ・西日本はこの夏、降雨に恵まれず、各地で「雨乞い」の儀式まで行われた。田圃はひび割れ、葉野菜は枯れかけた。常に洪水と干ばつの危機を内蔵する列島。古代から、日本人たちは雨水を確保し、調節する「ため池」を築いた。日本一のため池王国、兵庫県東播磨地方では、今、ため池を文化と捉え、未来につながる動きが出ている。「循環の思想を秘めた人類の叡智を世界遺産に…」と様々なアプローチが続いている。
- 2005.10.22.(朝日新聞)
  - ・千年を超す歴史を持つわれらがため池群をユネスコの世界遺産に登録しよう。そんな夢を、日本一のため池王国、兵庫県の県立農業高校の生徒 7 人が 26 日、全国にアピールする。
- 2006.03.09.(読売新聞)
  - ・宮崎で昨秋開かれた第 3 回全国高専デザインコンペティション。3 部門計 300 以上の作品から 2 部門で最優秀賞を獲得した研究室が注目を集めた。明石工業高等専門学校の建築学科、工藤和美の研究室だ。とりわけ高い評価を得たため池再考は、5 年前からの活動をまとめたもの。かつて、ため池は雨の少ない瀬戸内地方の生活に不可欠だったが、いつのころか放置されるようになった。そのため池の豊かな自然と生態系をよみがえらせ、子供の居場所づくりにも役立たせる構想だ。審査員たちは、地域のニーズを読みとり、それにこたえた学生の調査力や発想力に舌を巻いた。
- 2006.05.04.(神戸新聞)
  - ・9 日からフランス・カーン市で開かれる「第 7 回世界閉鎖性海域環境保全会議」で県立農業高校 3 年の迫之上杏奈さんが学校近くのため池で取り組んでいる環境保全活動について発表する。
- 2006.06.28.(神戸新聞)
  - ・東播磨地域では、点在するため池と、それを結ぶ水路をまるごと「ミュージアム(博物館)」と見立てて、ふるさとの魅力づくりに取り組んでいる。今年 3 月まで約 10 ヶ月間にわたり開催された「いなみ野ため池博覧会」では、各地で 250 のイベントが実施された。その成果を生かしつつ、今後、ため池にかかわるグループが情報交換できる場をつくる。
- 2006.11.11.(神戸新聞)
  - ・兵庫県立大学で 11 月 10 日開催された「国際ため池シンポジウム 2006」で、岡田真美子実行委員長(兵庫県立大学教授)は「文化や防災面からもため池は地域の宝だ。(いなみ野ため池ミュージアムは)民間と行政が一体となって管理され、地域のネットワークづくりに貢献している」。
- 2007.01.03.(神戸新聞)
  - ・日本には昔から「入会」という共有地管理の仕組みがあった。自主的にルールを決め、資源を採り尽くさないよう大事に使う手法だが、外からは閉鎖的とみられ、構成員が高齢化すると代わりがきかない問題も残す。「ため池協議会」は、入会の弊害を改め、共有地のルールや地域内の信頼を再構築する社会実験といいいい。実践を通じて水辺の伝統や知恵を伝える。ため池というコモンズを、皆で支える仕組み自体、新しい地域資産といえる。
- 2007.04.27.(神戸新聞)
  - ・住民組織「ため池協議会」が急増しています。2006 年度には新たに 7 組織が発足し、計 12 組織となり

ました。設立が加速した理由について、市は「高齢化や後継者問題に悩む農家、農家以外の池の管理者を確保したい国、自然環境を守りたい市民、と言う三者の思惑が一致したため」と分析している。

- 2008.03.17.(神戸新聞)
  - ・住宅地が立ち並ぶ加古川市平岡町新在家地区。海拔が低く、大雨が降ると用水路に大量の水が流れ込んで道路にあふれる。原因は何か―「ため池が減ったから」です。「ため池を守ることは地域の農業、自分たちの食を守ることに繋がる」
- 2009.03.30.(神戸新聞)
  - ・2008年1月から、いなみ野ためミュージアム運営協議会、NPO 法人ひょうご森の倶楽部、明石工業高等学校専門学校が堅穴住居復元プロジェクトに取り組んでいます。復元に携わった明石工業高等学校専門学校の生徒は、「堅穴住居が完成する過程が見られ、いろんな年代の人との協働作業も楽しめました」と話す。
- 2010.12.15.(神戸新聞―内橋克人・トーク&トーク)
  - ・明治以降ため池が埋められ、各地に近代的なダムが造られた。両者の違いは何か。ため池は、地域の人々が生きてゆくため、みんなで力を尽くして管理した。それは自分たちでルールを決め、それを守ることが求められる。地域による自律、自立でありすなわち自治だ。
- 2011.01.12.(神戸新聞)
  - ・養殖ノリの色落ち対策として、ため池の水を抜き土砂などを除去する「池干し」の後、栄養分を多く含んだ池の水を海に送り込む試みが、県内のノリ産地で取り組まれている。明石市でも11日、ため池の水の放流が始まった。全国2位の養殖ノリ生産量を誇る一方、ため池も全国最多で、色落ち対策と池干し後の水の再利用という「一举両得」に、漁業者や農業者の期待は大きい。